



Design



～地域包括ケア病棟から地域をデザインする～

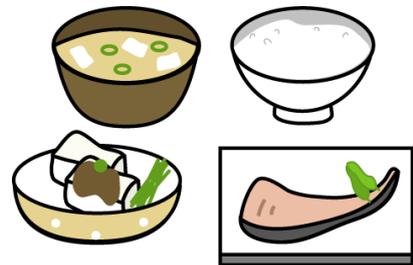
発行元：地域包括ケア病棟・リハビリ科・地域医療連携室

地域包括ケア病棟とは

地域包括ケア病棟は、平成26年の診療報酬改正で新設され、当院では同年8月より運用を開始しています。地域包括ケア病棟の役割のひとつには、地域からの受け入れが挙げられており、在宅から受け入れすることで疾病の重症化を避け、住み慣れた地域で住み続けることが可能となります。

当院の地域包括ケア病棟で受け入れ可能な方について (地域からの受け入れ)

1. 痰の吸引、点滴などの医療的処置が必要なため、介護施設でのショートステイの利用が困難な方（メディカルレスパイト）
2. 短期集中リハビリテーションが必要な方（入院期間は2～3週間）
3. 摂食嚥下機能評価を希望される方
4. 痰の吸引方法など、ご家族への指導が必要な方
5. CKD（慢性腎臓病）教育入院
6. 糖尿病患者さん食事体験入院
(2月から受け入れを開始しました)



問い合わせ先

地域医療連携室（担当：中嶋・南出）

TEL：0774-72-0235

E-mail: ti0001@yamashiro-hp.jp

※バックナンバーは、[当院ホームページから閲覧できます。](#)「[トップページのご利用者への案内](#)」→「[入院案内](#)」→「[地域包括ケア病棟の御案内](#)」

地域包括ケア病棟で受け入れた事例（第12回）

利用目的：ご家族への手技指導

胃ろう造設目的で当院一般病棟に入院し、ご家族へ注入の手技指導のため、胃ろう造設後は地域包括ケア病棟で過ごして頂きました。ご家族も高齢であるため、手技の習得が難しかったのですが、退院後にサービスを担って頂く訪問看護師の方と連携し、自宅退院することができました。（主任ソーシャルワーカー 中嶋 庸介）



胃ろう造設後、実際に胃ろうからの注入をご家族が行なうと、胃ろうと栄養剤のチューブを接続する操作や栄養剤のチューブを胃ろう本体から外れないようコネクタに接続する操作など、手先を使う細かな操作や手順が指示なしではなかなか実践することができませんでした。また、指導当初、ご家族は皮膚に埋め込んだ胃ろうを目の当たりにし、戸惑いを感じてか、胃ろう注入に対して消極的な場面も見受けられました。

しかし、地域包括ケア病棟での継続した指導や精神的サポートで安心されたのか、ご家族は在宅介護に前向きな姿勢が見られました。また、退院前にはカンファレンスを実施し、残された課題を訪問看護に引き継がせて頂きました。

病院から地域へ、切れ目のない支援を継続した結果、退院後の現在、胃ろうからの注入はご家族が中心となり実施され、訪問看護の介入も終了となっているとのことです。

これからも私達はチーム医療で患者さんとご家族を支えていきたいと思っています。（退院支援専従看護師 豊島 邦代）

地域医療連携室より

“連携”の意味について

先日、岩本副院長と日頃の“連携”について話をしていました。その話の中で、「そもそも連携って？」という話になり、ハッとしました。意味を深く考えないまま日常的に“連携”という言葉を使っていることに気がついたからです。

“医療と介護の連携”、“病診連携”、“多職種連携”など、“連携”という言葉日々、様々な場面で使っています。私が所属している部署も、地域医療連携室です。

インターネットで“連携”と検索すると、「連絡を密に取り合って、一つの目的のために一緒に物事をする」と出てきます。一つの目的のために、とありますが、「目的（目標）を共有すること」が大切だと思いました。そして、連携することの大前提として、「他の職種の業務内容を理解して」という言葉を付け加えておきたいと思います。

皆さんは連携の意味について、どのように思われますか？

（地域医療連携室 係長 南出 弦）

